

・・・雨でも休まず、279, 300回、・・・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・ 定例活動1：2月7日（第一日曜日）；今年、最初の森林整備活動、担い手育成、技術向上と「持続的森林経営：森林地団地化・集約施業」を目指す。
弁当持参、参加費：400円
 - ・ 定例活動2：2月21（第三日曜日）：若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動。
参加費400円、主食・自分の汁椀、飲料水。
- *注意1：初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ。**
- ・ 服 装：汚れても良い服装、着替え・滑らない靴。
 - ・ 持 参：成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水
- *注意2：危険管理・救急体制：森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。**

先進国型産業であるべき・・・森林・林業

太陽エネルギーは、「木：炭素の塊」に姿を変えて蓄積されている。炭素は、有機物として全ての生物の構成材料であり 1000 万種を超える物質の基礎原料である（百科事典ウィキペディア、参照）。この炭素の塊：「木＝太陽エネルギー」を有効に使っていないのが、今の我が国の林業の実態である。日本の木材需要は 8,200 万 m³/年（東京ドームの約 660 個）でその 8 割が外材の輸入に頼っている。この状況を打開する視点で「森林・林業」を再編すれば、森林・林業の新たな姿が見えてくるはずだ。今後、国産木材で新たな需要を発掘して満たせば、大変な需要と雇用を創出できるビジネスチャンスとなる。世界の林業を見渡せば、「林業」は、先進国型産業だと言う事が分かる。ドイツの森林面積は、1000 万 ha で（日本は 2515 万 ha）木材生産量は、7700 万 m³（日本では約 2000 万 m³）を越えている。オーストリアでは貿易黒字の 5 割を木材産業で稼いでおり、森林国フィンランドではエレクトロニクス産業に次ぐ輸出量である。

・ 林業が何故、先進国型産業か。

炭素は、1000 万種を超える物質の基礎原料であるから、その塊である「木」は、膨大な製品に姿を変える事が出来る。先ず、「衣食住」の「住」の最大の素材である。パルプの需要は膨大で、情報伝達の主役が担える。化石燃料の枯渇が心配なら「太陽エネルギーの塊・木質バイオマスエネルギー」を考えれば良い。

更にその他、リグニン・黒色顔料がある。黒鉛はタイヤなどゴム製品の混練材、電極材の有望株だ。石油の脱硫等の吸着材、有害ガスには吸着分解材もある。セルローズもある。エタノール・メタノールの技術も実用化の今一歩手前まで来ている。「森林・林業」を我が国の産業システムの中で洗い直せば、主要産業として生かす途がある筈だ。国土の約 3 分の 2 が森林である我が国が如何に、森林資源を生かしていないか。第二次世界大戦後、我が国はやみくもに米国型産業に追随してきたが、我が国の産業にとって必ずしも良い結果をもたらしたとは限らない。ここで改めて我が国の「森林・林業」を考え直して見る必要があるのではないか。

訂正とお詫び：1月号で我が国の森林面積は、1500 万 ha と記述していました。当ニュースレターの読者から、指摘されて気が付きました。最も基本的な事を誤って広報しました。日本の森林面積は約 2515 万 ha です。訂正してお詫びします。日本の森林は近年、微減の傾向が心配です。

・小原本陣の森：土地のしきたりでは、10日までは山に入らないそうです。そこで当会も第一活動日

1月3日（第一日曜日）は、活動なしとしました。

.....
・若柳嵐山の森 定例活動：17日（第三日曜日）

報告 伊藤小夜子

新年、マッサらの雪。

森の中は砂糖の粉を撒き散らしたような雪がうっすらの今年初の定例活動日。

新年男（新年は必ず来る）白石さんの恰幅の良い姿が久々に見える。参加者：ノバ、一般を合わせて35人。朝礼では内野さんが川田さんに替わって“若柳嵐山の森”の新しい統括責任者としてご挨拶。内野さんは、全日本インストラクター協会神奈川会の理事でもある。何でも昆虫や植物に詳しく、箱根駅伝では早稲田大学の花の二区を走った由。そのガッツと、軽快なフットワークからいろいろ学びたい。

作業を始める前に全員で森の入口にある“森神様”に新年のご挨拶。昨年の無事故を感謝し今年の安全を祈願した。

- ・緑のダム体験学校・斎藤さんとお花畑班は、桂北小学校と協働している「カブトムシの住まいづくり」のための落葉を集めた。この住まいの四角い箱には宝箱と木札が貼られている。
- ・森林整備班は、林内乾燥した丸太を林道脇まで担ぎあげた。何でも、家具メーカーがFSC材製品を作ってくれるそうだ。運びあげ後は、「望星の森」までの経路整備に精を出す。
- ・木工班は小原町への出張作業から戻り、木工小屋の入口の補修や道具棚などの整理などに追われていた。
- ・学生連合フォレストノバは、内野先生ご指導による植生調査。ピッタリ息が合って話が弾む。

お昼は、熱々のけんちん汁に、スズ子ママの差し入れのイタリアン白菜着け。

午後、森の入口の登山やハイカーがズロズロ通る道脇に「緑のダム北相模」の活動を紹介した立派な看板を皆で建て、仕上がったところで記念撮影。この看板には「森林の保全・再生の意義」が書かれており、“無償・善意の人々の事業”という内容にジーンとした私。

この活動を支援して下さっている支援団体名も紹



木工小屋の整理と周辺の補修



県道わき、森の入口に建てる。

介されている。ハイカーなど、沢山の人々が読んでくれて森林整備の大切さに気が付いてくれて、森に足を運んでくれるといいナァ！。

活動を早目に終えて3時半から、相模湖交流センター“ル・ポン”で新年会。昨年の充実した活動は、神奈川県と協力した森林整備の成果、新たに相模原市との市民協働・森林整備事業の始まり、毎日新聞社・水と緑の地球環境本部との取組、「緑のダム湘南の森」の発足も報告された。五つのテーブルに分けてテーブル毎の新年への抱負もハツラツと新入大学生の自己紹介も楽しく、有意義な新年会でした。

・湘南の森便り：定例活動報告：12月26日（土）

参加者10名。今回の初参加は関さんと吉永さん。関さんは新潟県・長岡市の「おやじの山」の山主として、年間半年はこもりきりで山の作業に精を出す林業の専門家です。吉永さんは東海大2年で会員の宮坂さんの知り合いとのこと。

2ヶ月続けて週日の作業日が雨のために中止になって、今回もひと月ぶりの作業となりましたが、冬枯れで雑草の生育が止まり、笹とアオキという我らの下刈り相手のみ目立って、かえって作業がやりやすくなっています。今回はセンターヤードの遊歩道側の下刈りを主体に作業を行いました。特別参加の関さんに刈払機作業をお願いしましたが、さすがベテランらしく効率よく藪を刈っていただきました。

辺見さんと佐藤は、前回刃が切れずにくやしい思いをしたチェーンソーに、和田さんの指導で挑戦し、今回は首尾よく、4本の桜の枯れ木の伐採に成功しました。伐採の後は刃の目立てのレクチャーを受け、このあとしばらく来られない「きこりの和田さん」のノウハウの一部を「湘南のきこり」（軟弱の響きあり？）が吸収し、今後は一本立ちを目指します。

他の人たちは手作業で遊歩道に沿ったアジサイの群生地付近の下刈りと整理を行いました。1年ぶりに参加した都留さんの印象は「ずいぶんきれいになった！！」というものでした。

冬とは思えない無風の暖かい日で、快適な作業でした。ともしびショップは大掃除で休みだったので、展望台のレストランで軽く反省会をして解散しました。（佐藤記）

.....

相模川上流・中流・下流流域をつなぐ意図で、「大月・相模湖・北鎌倉・湘南」を繋いだ森林活動は、完成に向けて今一步まで進んだ印象があります。

夫々の活動は、その地域に合った活動をとということで独自の行動、独立採算制を取っていますが「森林破壊という負の遺産を子孫に残してはならない」という基本理念を共有しています。

そして、5年前、「環境と経済が矛盾しない流域社会の構築」という意味で、大蔵平塚市長、服部茅ヶ崎市長にも、森林に想いを致して欲しいと申し入れ、受け入れて頂きましたが、中流の相模原市が当会の「グリーンハブシティ構想」に耳を傾けてくれるようになった今、「湘南の森」の活動は、上流・中流・“下流”をつなぐ役割を大いに果たしてくれるようになり、流域をつなぐ活動が見えるようになりました。（石村記）

全国学生環境活動コンテスト 2009 に参加／12月26日(土)・27日(日)

Forest Nova☆ 麻布大学2年 廣石由美

2009年12月26日(土)、27日(日)の2日間に渡り、立正大学の大崎キャンパスにて全国学生環境活動コンテスト2009(通称:エココン)が行われました。エココンとは、全国で環境活動をしている学生団体が、自分たちの活動を5分間でプレゼンし、活動を様々な面から評価してもらうものです。Forest Nova☆は過去2年参加し、今年もエントリーしました。



今回のプレゼンでは、森の現状を伝え、多くの人に森について興味を持ってもらいたいという想いを大切にし、学生の強みである森の現状・間伐材利用の重要性などの『発信』を中心に発表を行いました。

1日目には8つのグループに分かれてのグループ選考があり、このグループの中で1位となったところが2日目の最終選考にてプレゼンをすることができます。結果として今年は惜しくも最終選考にはいけませんでした。が、自分たちの活動の振り返りや、活動の意味を考える機会にもなりました。また、他の団体の発表を見て、交流をすることで多くのことを学ぶことができました。この経験をまた活動に活かしていきたいと思います。



また、27日には『エコット』という分科会が開催され、今年はJUON NETWORKの鹿住さんと、more treesの水谷さんとともにForest Nova☆の代表神宮と斉藤が講師を務めました。ここでは、『森で活動しよう！社会で活躍しよう！』というテーマで、講師方の対談や、参加者との質疑のやりとりを通じて、森の現状の紹介、森林活動の学生と社会人の情報交換、学生が社会に出たときにどういった活動ができるのかなどのお話が繰り広げられました。

社会での森の活動のお話はとても勉強になり、学生にできることもまだまだあることも感じられました。

2010年もみんなで活動を頑張ります。今年もよろしくおねがいたします。

森林・林業蘇生の話題・2題：女性の経営する森林組合

1、美山村森林組合：和歌山県（寒川歳子組合長：60才）

木材市場で杉1立米が1万円にもならず伐出費用だけでも持ち出しになるから、山主は森林を放棄する。森は荒廃する。高齢化が進む。1995年、寒川歳子理事長が「グリーンキーパー制度」を活用して職員の募集を始めた。初年度は新人3名を採用し、ベテラン一人がついて基礎を教えた。10年を経過した今、現業34人の内、25人は県外出身だ。2004年に組合長に推され、初年度は2400万円の欠損となり、いきなり崖っぷちに立たされた。補助金頼りがそのツケだった。どうしたか。

美山村森林組合に関する朝日新聞の記事を引用しましたが、著作権の関係からウェブページでは省略しました。

まず、情報の共有化をすることで信頼回復の第一歩とした。次いで、人件費の大幅カットに皆な良く耐えてくれた。

目指したのは「低コスト林業」。搬出用の作業道づくりは、「森林がいたむ」とする山主に対しては「コストを下げれば木が売れます」と説得した。コストを下げて搬出費用と販売費用が釣り合った。今年から、使い道のない木の根っこや先端の葉っぱ部分を燃料にして公共施設で使う事にした。環境意識も追い風となって、地球温暖化対策として企業が組合に植林や管理を委託すると、企業が排出する二酸化炭素量が減ったという制度も和歌山県に出来た（朝日新聞記事参照）。

林業は、捨てるものがない資源循環型産業だ。寒川組合長のやってきた事は、当たり前のことだった。和歌山県の辺境の地を元気にすることに繋がっている。

2、多野東部森林組合：群馬県（新井和子参事：常勤理事）

一昨年8月、林野庁計画課の紹介で、森林仲間や森林に興味を持つ人々を誘って同組合を視察した。

この組合の実質上の責任者は、新井和子参事であった。新井参事は元は、この組合の事務員であった。真面目で情熱家の新井事務員の仕事ぶりは際立っており、多数の組合員から参事に押されて事業の統括者となった。管理森林面積は約12,400ha、組合員数1,716名、役職員数は理事14名、監事3名、現業職員34名である。収益概況は以下の通りである（平成14年実績）

収入	指導料	11,153千円
	販売高	647
	購買高	8,861
	利用高	104,805
	金融	1,492
小計		127,048
支出		123,322
経常利益		3,726

*収入の具体的内容が不明なので機会があれば、教えを乞いたいと思っている。

主要事業

管内の主な事業は、鬼石町・町有林事業である。鬼石町では、「若者定住促進事業」として建築材1棟分（製材木20立米相当）を提供している。それ以外に町営住宅、保育園、その他の公的施設に町有林の間伐材を積極的に利用している。また、並行して「長期育成循環整備事業（国）」を実施している。この搬出費用があり製材業者が人工乾燥して町の利用事業に結び受けている。鬼石町は、育林・間伐・搬出・利用まで一貫した補助体制を敷き、事業確保、定住促進という一

石三鳥効果をあげている。

* 同組合の世代交代・雇用について。

・雇用と定着：平成 6 年頃から、リクルートの UJI ターン Be-ing やハローワーク、労働力確保支援センターを積極的に活用した。作業チーム体制を取っており、採用基準は性格重視で協調性のない職員は解雇も行っている。高性能機械の導入を積極的に取り組み、職員の技術差が出ないようになっている。

月一回の班長会議、全作業員による労働安全衛生会議を定期的実施している。毎日の朝礼では、一人ずつ目標を発表している。就業アンケート・提案は、理由を添付させ重視した。このようなきめ細かな積み重ねが、大きな意味を持っている。

・待遇：給与は日給制（8500～10500 円）。基本給は内勤も外勤も同額。手当として班長・副班長・通勤・運転・整備がある。平成 10 年から社会保障が整備された。



従業員を大切にしていると言う組合幹部の姿勢は、平成 11 年以降、離職者を出していない事が物語る。この組合の地道な経営態度は、原木市場や製材・加工設備を備えた木材コンビナート建設に繋がっている。女性の細やかな気配り・配慮が如何なく発揮され効果を挙げているのが、この森林組合の成功しているポイントである。(林業現代より抜粋)

今の日本の環境を救えるのは、森だと思ふ。

社団法人 国土緑化推進機構

国土緑化推進機構から送ってきた冊子の記載です。全く同感です。国土の 7 割が森林だという膨大な森林資源を生かせない我が国の森林・林業は、どこか間違っているのではないか。そんな状況で「今の日本の環境を救えるのは、“森だ”」と言うのは同感です。

但し、どのような方法で救うのでしょうか。その視点・具体的な対策がなければ、画餅の感がします。そこで当会の主張は、FSC の指導する「環境・経済・社会」のバランスの取れたシステムづくりだと言いつつ、その具体的な方法を表紙トップに掲げています。

民主党政権になって、「森林= 緑のダム」と言う政策が急速にクローズアップされています。それまでは、インターネットで「緑のダム」を検索したら、「NPO 法人緑のダム北相模」の関連記事がズラリと出てきましたが今では、それが後退し、「緑のダム」を開く毎にいろんな意見が何百となく増殖しています。“してやったり！！”の気分です。

「緑のダム」と言う言葉は、今の神奈川県松沢知事が未だ民主党の若手の有望国会議員として活躍していた 14・5 年前に接しました。何かの新聞で松沢議員がこの「緑のダム」を言う言葉を引用して環境問題を論じておられたのが最初です。そんな事を云う国会議員はどんな人だろうと議員会館の松沢事務所をお訪ねしました。それがまさかの神奈川県知事になられて、ずっとお付き合いが続いています。私が森林ボランティアを始めたのも当時の松沢議員からの影響も大です。

今、「緑のダム」を検索したらトップに、以下のような事が書いてあります。

「緑のダム、[英]=Green Dam」解説：森林の持つ、水資源涵養機能や土砂・砂防機能に着眼し、国土保全上の役割と大切さをわかりやすく表現するときに用いられる言葉。

2000年11月3日、民主党の鳩山代表（当時）より発表された「緑のダム」構想では、「日本にある、およそ2600のダムの貯水量は202億トンである。これに対して、林野庁の試算に依れば、日本の森林2500万haの総貯水量は1894億トンであり、ダムの9倍にもなる。そして森林には貯水機能だけでなく、水源涵養や土砂防止機能もあり、その効用はダムを遥かに上回る。河川行政の目標を「コンクリートのダム」から「緑のダム」に切り替えなければならない。

森林を育てるための「間伐や蔓切り」はダム一個分の建設費用程度の2250億円分で行うことができ、それを実施すればダムをはるかに上回る効用を得る事ができる」と述べた・・・とあります。

現場主義の現・松沢神奈川県知事が、知事選立候補に際して「環境：水源環境の保全・再生」をマニフェストのひとつに掲げました。そのマニフェストは財源を年間・約40億円を捻出して現在、12の事業を推進しています。然し、神奈川と言う地域の特性から「持続的森林環境の保全・再生」政策には、経済性：持続的森林経営の認識が希薄です。この政策は5年・4期、計20年間の政策ですから漸次、見直されていくでしょう。私が「県議会・委員」を拝命していた間、ズット経済性を取り入れていない森林対策は、意味がないと言いつつ続けました。発言の度毎にそう言いましたから、またか！、とヒンシュクを買いました。環境問題が世界の課題となって沸騰しはじめていますから、いずれ解決するでしょう。

こういう状況のなかで（社）国土緑化推進機構の「今の日本の環境を救えるのは、森だと思おう」というキャッチコピーは、なかなかのものだと感じます。そんな訳で4月に「政令指定都市」になる相模原市には当会は、性懲りもなく森林環境の保全再生には「経済性の創出を伴う：内陸・グリーンハブ都市」をやかましく提言しています（石村記）。

・助け合う仕組み NPO：緑のダム・定例運営会

1998年に活動を始めて殆ど、独断的な運営をしていた。活動9年目の2006年頃から不満が顕在化した。合意がなければ運営が出来ない規模になっている事に気付いた。それ以来、毎月第二金曜日、午後6時から情報開示した定例運営会にしている。2時間程度の打ち合わせ会を心掛けているが議題が白熱した時は、9時過ぎまで“ケンケンガクガク”と討議している。毎回、7人から多い時は非会員のオブザーバーを加えて10人程度が集まる。閉会後は、互いの健闘を讃えて「では、次の活動日に会いましょう」と別れる。それにしても、ウィークデイの夜に良くこんな大勢、集まってくれるものだ！・・・と半ば、呆れています。

活動は、13年目に入って更に、次の段階に進まねばならない状況になっている。そこで昨年10月から組織の見直しを課題に相談している。1月の運営会での状況を簡単に報告する。

・議題：来期事業計画、伴う組織の再編・予算の見直し。

討議の結果。

- 1) 定例活動と事業活動の分離化
 - イ、 活動・組織の予算対応の明確化
 - ロ、 組織の見直し
- 2) 組織・活動の予算対応
 - ハ、 事務局体制
 - ニ、 定例活動部
 - ホ、 事業部・・・(NPO活動部)

*非営利活動に、利益が前提の事業部という呼称は、何かシックリ来ない・・・という意見が出て、会議が盛り上がりました。討論の結果、「NPO活動部」という名になりました。但し、私は納得していません。非営利活動を継続するための資金源は、どうするの？ ボランティアが“貴方の勝手でしょ・・・”という風潮、寄付に期待できない我が国の風土がどうしたら変えられるの？

4年前、NPC: Non Profit Company (非営利会社) を実験してみた。見事、失敗に終わった。そんな事で課題を抱えたまま。1月13日付けの朝日新聞に神戸の「福祉NPOしゃらく」が認知症のお年寄りを旅行に連れていくニーズを見つけ出し、事業化して事業収入、1700万円を得ていると報道していた。環境NPOにもヒントになると感じた。私は未だ、事業化に拘っている。当会の運営会議で、こんな事が真剣に討議されていることは、とても意味のある事と思う。(石村記)

・助け合うしくみ・・・NPO ----- 市民・学際・業際・行政司法立法の繋ぎ役

NPO法(特別非営利活動促進法)は、福祉・教育・町づくり・環境など17分野が対象で、市民団体に法人格を与える制度として98年に成立。

法人名義で銀行口座の開設、不動産の登記などができる。資金の捻出が最大の課題で税制面で優遇される「認定NPO法人」制度が、01年度から始まったが手続きが複雑で約4万団体中、111法人の登録で全体の0,3%に過ぎない。

朝日新聞の記事を引用していますが、ウェブページでは、著作権の関係から省略しました。

-
- ・活動のモットー : 急がず、無理せず、楽しく、休まず、ボチボチと・・・。そして、沢山の参加で森は、良くなる。
 - ・名称 : 特定非営利活動法人 緑のダム北相模
 - ・事務局 : 154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9
 - ・発行人 : NPO 緑のダム北相模 運営委員会 03-3411-1636
 - ・HP : <http://midorinodam.jp> E-mail: info@midorinodam.jp
 - ・協働団体 : 神奈川県(政策部・環境農政部・県央地域総合センター森林課)、セブーンイレブンみどりの基金、相模原市(市民協働推進課)、毎日新聞社水と緑地球環境本部、東海大付属・望星高校
 - ・ご支援の団体 : WWF/JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミニテイ、(社)国土緑化推進機構